

「ちがつている」と「変」

枚方市立殿山第一小学校 五年 北川 琴音

わたしは、このお話を、読んで、「ちがつている」と「変」について、改めて考えてみました。このお話は、主人公のキーランという男の子の前に、ある日いとこのボンという名の子があらわれ、同じ学校に通うことになるのですが、風変わりな転校生のボンは、学校でいじめの標的となつてしまいます。キーランは、ボンを助きたい気持ちはありましたが、いざとなると、勇気が出ませんでした。

ですが、そんな中、はじめに立ちあがったのが、ボンと同じ時に、同じ学校に引っこしてき、ボンと二番の親友になつたジュリアという女の子でした。ジュリアは、ボンをいじめるグループから、どんなに悪口を言われたりしても、ボンを守ってあげていました。そして、その勇気は、ついにキーランの意思までも変えたのです。

わたしは、その出来事を読んで、ジュリアは周りの人の

意思を変える勇気を持っていて、すごいと思いました。

なぜなら、わたしは人としてまちがつている事をしていない人に、

「それは、まちがつてるよ。」

とは言っても、その人の意思を変える事は出来ないからです。

もし、ジュリアという子が転校してこなかったら、キーランは、ボンを助ける事が出来ずに、ずっと、心の中で苦しむことになっていたと思います。

いじめっ子たちが言う「ボンは変、おかしい」というのは、わたしは、良い意味で、ボンが他の人とはちがつている、それはつまり、ボンが持っている「個性」だと思いました。人は、それぞれがちがつていて当たり前です。ですが、それぞれの「個性」をみとめ合う事が、必要だとわたしは思います。

たとえ、少し苦手な子でも、「もういやだ、きらい。」と決めつけるのではなくて、別に、無理に好きにはならなく

て良いけれど、一つぐらいいは、良い所がぜったいあるはずなので、見つけてあげて、その個性を少しでもみとめ合えたらすてきだし、自分自身もそうなりたいと思いました。
そしてなにより、個性をみとめ合うことによつて、いじめが少しでもへつたらいいな。と思いました。

「ひとりじゃないよ、ほくがいる」

作 サイモン・フレンチ

訳 野の水

福音館書店

